

## 上郡町の偉人

## 大鳥圭介

## 「鵬程万里」第九回

著者 中川由香

戊辰戦争での大鳥圭介について、評論などでは以下の証言が良く取り上げられます。「大鳥さんが配下を派遣して戦わせると不思議に勝つ、自分が出る」と必ず負ける。しかし負けても実に平気なものだ。

『また負けたよ、ハッハッ』と笑いながら平気の平だった「大鳥さんは陸軍の大將であつた癖に、実戦は実に下手だ。兵を語るのには上手だが、兵を用いるのには下手だ」この証言を元に、圭介は連戦連敗の戦下手で、将才はないと描く小説やドラマが多数あります。しかし本当に圭介は戦下手だったのか。それには異論があります。

右の証言をしたのは安藤太郎という新聞記者です。安藤は圭介が塾頭をしていた坪井塾で学び、ヘボンの英語塾では同窓でした。しかし戊辰戦争においては、安藤は榎本脱走に同行した海軍士官であり、圭介の北関東・会津の戦に関しては、伝聞でしか知らないでしょう。また箱館でも圭介と軍務で接点はほとんどなく、圭介の指揮能力を直接目で見て評価する立場ではありませんでした。

実際、圭介の三十余の戦闘を数えると、五割以上の戦闘では勝利しています。当時の新聞は以下のように伝えています。「大鳥の兵の構成の巧な事実に感嘆」(中外新聞)「大鳥は沈勇にして大度あり、かつ文武兼備の人、当時の豪傑」(もしほ草)「全戦闘を通

じて、官軍の敵の中で一番優れた指揮者の一人。彼が指揮する所では、どこでもその名は大敵とみなされた。彼こそ他の誰より官軍の進軍を食い止めた。若松では勇敢な天才であつた」(ヤングジャパン)

実際に圭介と宇都宮で戦つた野津鎮雄は「大鳥の戦略神のごときを褒めぬものはない。大鳥は実に戦上手だ。我々は負けても恥でない」(西郷隆盛評伝)と語りました。その他にも、「韜略に通じ、善く兵を用い、稀に見る所の人物なり」(会津史)、「作戦の巧妙愈神秘の極なり」(大鳥圭介、部下を指揮して、頑強勇邁、列戦奮闘、砲銃弾の運用、巧に妙を極め) (慶

応戊辰奥羽蝦夷戦乱史)など、圭介の「将才」を伝える史料は無数にあります。命令一下で統率され戦う圭介の伝習隊は、精銳、剛強無比であり官軍を恐れさせました。また、日光口を守備した藤原の戦いでは、圭介は地形を生かし獵師を活用し地元ならではのゲリラ戦を展開しました。「配下を遣わすと勝つ、自分が出ると負ける」というのは、勝ちの見える戦いは部下に任せ、困難な闘いほど陣頭に立ち、殿で銃弾を潜りぬけたからこそ言えることでしょう。

もちろん毀誉褒貶はあります。凌霜隊の矢野原与七は「心苦雜記」に「大鳥圭介は因循だ、名高き人と思つたが思いの外だった」と記しました。与七が圭介と共にいた藤原では、二カ月以上ろくな食糧も酒

も娯楽も無く滞陣を続け、兵の不満が非常に高まりました。いわば劣悪な労働環境で社長をこき下ろす感覚での批判を浴び、圭介は大きく苦勞しました。圭介はよく自身を謙遜しました。江戸を脱走した直後に国府台で集合した際は「自分には実戦経験がない」として総督を辞退しようとした。これで「実戦経験のない机上の戦略家」と後世の作家に決めつけられた面もあります。「百敗不屈」と書画を描くなど、圭介は敗戦の責任を一身に担い、自身を敗者と位置付けていたため、後世で連戦連敗の印象を強めてしまった節もあります。戊辰戦争は脱走後の旧幕府軍にとり、寡兵の厳しい戦の連続でした。

一方、負け戦においても、圭介ら旧幕府軍が敗北した今市の戦いでは、圭介の部下浅田惟季が「軍費と輜重は全て会津から供給されたので旧幕府の指揮が味方の会津に及ばなかった。これは脱走し補給元が無い幕臣の辛いところだ。敗北を後世はみだりに拙策と批判するべきではない」と弁護しました。浅田は宇都宮で圭介が兵を撤退させた時も「機を知つて速かに軍を退いたのは、真に大鳥氏の神算だった」とし、圭介を尊敬していました(北戦日誌)。

さらに圭介と箱館の戦争を共にした林董(日英同盟時の外務大臣)は「今日の陸軍の基礎を作つて、それを進歩させた事については至大の功勞のある人」男爵は胆力の強い意志の鋭い方であつた」と述べています。

これらより、人の評価は一面的に決められるものではないと思ひ知らされます。偉人の評価は、真摯に資料を比較対照して行う必要があります。